

達 志保『徐福論・いまを生きる伝説・』(二〇〇四年、新典社)より

【文献資料①】中国／紀元前九一年／司馬遷『史記』秦始皇本紀六

吉田賢抗『史記』一(『新釈漢文大系』三八、一九七三、明治書院)

始皇帝二八(紀元前二一九)年

齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊・方丈・瀛洲。僊人居之。

請得齋戒、與童男女求之。於是遣徐市僉童男女數千人、入海求僊人。(齊

人徐市等上書して言ふ、海中に三神山有り、名づけて蓬萊・方丈・瀛洲と

曰ふ。僊人之に居る。請ふ齋戒して童男女と與に之を求むることを得ん、

と。是に於て徐市をして童男女數千人を發し、海に入りて僊人を求めし

む。)

始皇帝三五(前二一二)年

徐市等費以巨万計、終不得藥。徒姦利相告日聞。(徐市等は費すこと巨

万を以て計ふれども、終に藥を得ず。徒に姦利をもて相告ぐることに聞

ゆ。)

始皇帝三七(前二一〇)年

方士徐市等入海求神藥、數歲不得。費多。恐謹、乃詐曰、蓬萊藥可得。

然常為大鮫魚所苦。故不得至。願請善射與俱。見則以連弩射之。(方士徐

市等、海に入りて神藥を求め、數歲なれども得ず。費多し。謹められんこ

とを恐れ、乃ち詐りて曰く、蓬萊の藥、得可し。然れども常に大鮫魚に苦

しめらる。故に至ることを得ざりき。願はくは善く射るものを請ひて與に

俱にせん。見はれなば、則ち連弩を以て之を射ん、と。)

【文献資料②】中国／七七二・八四六年／

白樂天「新樂府五十首(其四) 海漫漫 戒求仙也」

『白樂天全詩集』一(『統国訳漢文大成』一九七八、日本図書センター)

海漫漫、直下無底旁無辺、雲濤煙浪最深処、人伝中有三神山、山上多生

不死藥、服之羽化為天仙、秦皇漢武信此語、方士年年采藥去、蓬萊今古

但聞名、煙水茫茫無覓処、海漫漫 風浩浩、眼穿不見蓬萊島、不見蓬萊

不敢歸、童男艸女舟中老、徐福文成多誑誕、上元太一虛祈禱、君看驪山

頂上茂陵頭、畢竟悲風吹蔓草、何況玄元聖祖五千言、不言藥不言仙、不

言白日昇青天

海漫漫たり

雲濤煙浪 最深の処

山上多く不死の藥を生じ

秦皇漢武 此語を信じ

蓬萊今古但だ名を聞くのみ

海漫漫たり 風浩浩たり

蓬萊を見ずんば敢て歸らず

徐福文成 誑誕多し

君看よ 驪山の頂上 茂陵の頭

何ぞ況んや 玄元聖祖の五千言

白日青天に昇るを言はざるをや

直下底無く 旁边無し

人は伝ふ中に三神山有り

之を服すれば羽化して天仙と為ると

方士年年藥を采りて去る

煙水茫茫として覓むる処無し

眼穿たんとするも蓬萊島を見ず

童男艸女 舟中に老ゆ

上元太一 虚く祈禱す

畢竟 悲風蔓草を吹く

藥を言はず仙を言はず

【文献資料③】中国／九五八年／

釋義楚『義楚六帖』卷二一、国城市部第四三、国、日本国

『義楚六帖』（一九九〇、朋友書店）。書き下し文・達

日本国亦名倭国東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此国也今人物一如長安又顯德五年歲在戊午有日本国伝瑜伽大教弘順大師賜紫寬輔又云本国都城南五百余里有金峯山頂上有金剛藏王菩薩第一靈異山有松檜名花軟草大小寺數百節行高道者居之不曾有女人得上至今男子欲上三月断酒肉欲色所求皆遂云（中略）又東北千余里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有諸宝流下夜即卻上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏。（日本国は亦倭国と名づく。東海の中にあり。秦の時、徐福將に五百の童男五百の童女を此国に止めんとす。今人物一つにして長安の如し。又顯德五年歲は戊午に在りて、日本国伝瑜伽大教弘順大師賜紫寬輔有りて、又云ふ。日本国の都城の南五百余里に金峯山有りて、頂上に金剛藏王菩薩有りて、第一の靈異なり。山は松檜名花軟草有りて、大小の寺數百、節行高道の者之に居る。曾て女人有りて上ることを得ず。今に至るも男子上らんと欲せば、三月酒肉欲色を断つ。求むる所皆遂げて云ふ。（中略）又東北千余里の山有りて、富士と名づけ、亦蓬萊と名づく。其の山峻にして、三面是れ海、一朶上聳して、頂に火煙有り。日中に上より諸宝有りて流下し、夜は即ち卻りて上る。常に音楽聞ゆ。徐福此に止まりて、蓬萊と謂ふ。今に至りて子孫皆秦氏と曰ふ。）

【文献資料④】日本・中国／一三七六年／

蔭木英雄『蕉堅藁全注』（一九九八、清文堂出版）

応制賦三山 絶海中津

熊野峰前徐福祠、満山菓草雨余肥

只今海上波濤穩、万里好風須早帰

熊野の峰前 徐福の祠

満山の菓草 雨余に肥ゆ

只今海上 波濤穩かに

万里の好風 須らく早く帰るべし

御製賜和

大明太祖高皇帝

熊野峰高血食祠、松根琥珀也応肥

当年徐福求僊菓、直到如今更不帰

熊野の峰高し 血食の祠

松根の琥珀 也た肥ゆべし

当年 徐福 僊菓を求め

直に如今に到るまで 更に帰らず